

最高学部

ポーランド研修旅行・関連行事

咲花 昭嗣

自由学園最高学部の学生 8 名は、6 月のポーランド研修旅行に参加し、ポメラニアン大学の学生との交流、授業参加、そしてポーランドの歴史的な場所の訪問を通じて、多角的な学びを得ることができた。さらに、帰国後の 11 月には報告会・ポメラニアン大学学生訪問受け入れ、12 月のウクライナの子どもたち絵画展開催と、さまざまな経験をしてきた。約 1 年間にわたる関わりが旅行の意義をさらに深め、広げることになり、この研修を通じて得た学びや気づきを、今後の学びや生活に活かしていくことが期待される。

① **ポーランド研修旅行** (2024.06.2-16)

事前には、『夜と霧』の講読と映画『関心領域』の鑑賞を推奨し、しおり制作・交流プログラムの 2 班に分かれて準備を進めた。

研修の前半は、ポメラニアン大学にて現地の学生たちとの交流が行われた。日本とポーランドの学生が互いの文化や価値観を共有し、ディスカッションや共同プロジェクトを通じて理解を深めることができた。

研修の後半では、ポーランドの歴史を学ぶため、アウシュビッツ＝ビルケナウ強制収容所、第二次世界大戦博物館などの博物館、グダニスク・クラクフ・ワルシャワ各都市を訪れ、歴史的背景や文化を肌で感じる事ができた。

本報告では、各プログラムの概要と共に、参加学生の感想を紹介する。



研修旅行参加者

学部 3 年: 内田 颯、梅崎 花子、堀越 明、松島 希実

学部 2 年: 浅田 雪乃、恵木 美祈、山下 真生

学部 1 年: 尾辻 嶺

担当・引率: 咲花 昭嗣

日程		ポーランド研修旅行 (グダニスク・スワプスク・クラクフ・ワルシャワ)		2024年6月2日 (日) ~ 16日 (日)	
参加者		参加者 (1名) 咲花 昭嗣、梅崎 花子、堀越 明、松島 希実、内田 颯、浅田 雪乃、恵木 美祈、山下 真生、尾辻 嶺 (計 8 名)			
日程	日付	スケジュール	場所	内容	備考
1日目	6/2	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
2日目	6/3	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
3日目	6/4	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
4日目	6/5	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
5日目	6/6	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
6日目	6/7	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
7日目	6/8	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
8日目	6/9	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
9日目	6/10	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
10日目	6/11	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
11日目	6/12	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
12日目	6/13	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
13日目	6/14	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
14日目	6/15	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		
15日目	6/16	ポーランド到着 (グダニスク) - ホテルチェックイン	グダニスク		

旅行先: グダニスク (Gdansk)、スワプスク (Swapsk)、クラクフ (Krakow)、ワルシャワ (Warsaw)
ホテル: グダニスク (Gdansk)、スワプスク (Swapsk)、クラクフ (Krakow)、ワルシャワ (Warsaw)
交通機関: 飛行機、バス、鉄道

【経費】 総額 ¥500,000 (参加学生 1 人あたり)
航空券 (羽田→コペンハーゲン→グダニスク/ワルシャワ→コペンハーゲン→羽田) ¥215,055
ポーランド国内交通費 (バス、鉄道) ¥53,850
施設見学費 ¥28,305
宿泊費 (グダニスク 2 泊、クラクフ 5 泊、ワルシャワ 2 泊) ¥135,600
食費 (全員での会食、ポメラニアン大学でのお礼交流会) ¥38,000
訪問先へのお土産、両替手数料など雑費 ¥29,190

ポメラニアン大学での交流

ポメラニアン大学では学生寮に宿泊し、大学の授業参加、ショートトリップ(ウツツカなど)、スウブスク市長との面会など貴重な経験を、学生同士の交流も深まった。これは、英語学科のWladyslaw Miciński 先生、Marek Łukasik 副学長のご尽力が非常に大きかった。

「ポメラニアン大学では1週間の時間を過ごしましたが、その中で、英語でのディスカッション・ポーランドの伝統舞踊であるマズルカの授業・合唱と弦楽合奏の授業の3つに参加しました。

英語でのディスカッションは課題解決型のもので、与えられたテーマに対してグループで話し合い、アイデアを出しました。テーマは合計3つで、それぞれ、様々な条件下においてアイデアを出す必要があるものでした。今までの学園生活では、懇談などでクラスの課題について話し合う機会は多くありましたが、授業として課題解決型ディスカッションをすることはほとんど経験がなく、日本とポーランドの教育の形の違いを感じました。

マズルカは、ポーランド舞踊の一つで、輪になって全体で踊ったり、ペアで動いたりします。まず、先生から基本の動きを教わった後、輪になった動きを教わりました。このような踊りを学ぶ授業も、英語でのディスカッションと同じように日本では経験したことのないものであり、新鮮な気持ちでした。

弦楽楽器が弾ける人は、音楽学部の人と一緒に弦楽合奏に参加しました。お互い英語が母国語でない中、音楽用語が共通語として役割を果たす場面も多く、音楽が言語の壁を超えるということを体感しました。合唱では、その場で楽譜をもらい、全く知らない歌を歌うことになりましたが、周りの学生が声をかけてくれ、ポーランドの人々の優しさを感じた一場面となりました。」(堀越)



グループに分かれてディスカッション

「大学の学生らとの課外活動については、まず初日にポメラニアン大学の学生、教師らによって開催されたピザパーティがキックオフイベントとなりました。

このイベントでは、学部や国籍、年齢がバラバラなポメラニアン大学の学生だけでなく教師の子どもたちも参加し、ピザや副学部長自ら焼いたアップルパイなどを頂きながらざっくばらんにおしゃべりしたり、チーム対抗でゲームをしたりして3時間ほど楽しみました。

3秒前に出会った人たちと交流を深めるということは日本にいても緊張することですが、異国の地で相手方の人数が多い中で英語でコミュニケーションを取るということは正直怖かったです。しかし、私たち学生の間には圧倒的に異なる国の文化や自然、歴史的背景、学校のシステムがあるのでそういったことに関する質問を投げかけられ徐々に答えていくことができました。もちろんたどたどしい英語と最終手段の翻訳機を用いながらです。

それでも、初日にこのパーティがあったからこそ学生たちとの距離はグッと縮まったことを実感しましたし、英語で突然話す・コミュニケーションを取ることにする度胸が付きました。

4日目には Science and sports day という外部向けの文化祭のようなものが開かれました。ポメラニアン大学には日本での一般的な学部以外にも、看護や国防といったポーランドでは一般的な学部が備わっています。この文化祭の目標は、大学の化学研究を地域住民に理解してもらうことだそうです。また、学生だけでなく、地域の人々、警察やポーランド軍も参加しており、伝統衣装や伝統的な踊りを披露していたり、警察犬が登場したり、戦車に実際に弾を込めるところの実演なども見られました。大学という場を通して子どもたちへ、地域の様々な文化や役割を伝える場をつくっているということがよく感じられる機会でした。」(山下)



キックオフイベントに集まった人々

第二次世界大戦博物館(グダニスク)

グダニスクでは、第二次世界大戦博物館を訪問した。グダニスクはナチスドイツによってヨーロッパ戦が開戦された街であり、この博物館は広大な展示スペースに大戦の全体像が工夫を凝らして展示されていた。以下は学生の感想。

「WW2(world war II)博物館は、レンガ色のビルが地面から斜めに突き出したような格好の建物で、出身国を問わず、多くの人たちが訪れていました。

展示は、WW1後からヒトラー君臨の歴史、ソビエト連邦とドイツの対立、戦時下のグダニスクやポーランド全土の様子、WW2の終結、と続きます。キャプションは、英語・ポーランド語だけで、読んでも十分には理解しきれないだけに、実際の展示物・流れる映像、音楽・展示ブースの照明、館内の温度、空気感・周囲の人たちの会話など、展示を見て・読んで理解するのではなく、博物館を感じて・考えた時間となりました。

私たちはこの博物館で、日本の加害の歴史を感じてきました。ポーランドを蹂躪したドイツ、日本はそのドイツと連合国として共闘していたため、この博物館でも日本の様子が大きく取り上げられていました。異国語だらけの館内に、突如、日本語が書かれた展示がありました。掲げられた布には、縦書きで大きく「八紘一宇」や「大東亜共栄圏」とありました。薄暗い博物館の中、異国の展示の手にかかると、当時の日本がまるでとても強大な国のように、とても冷たく理不尽な国のように思われました。日本のブースを見ている時、やけに、周囲の人の視線が気になった瞬間があります。

博物館の展示はゆっくりと終戦へ向かい、広島・長崎への原爆投下についても取り上げられていました。狭い通路を進んだ先にあったのは、白くやわらかく照らされた天井の高い空間。粉碎された街の写真が並べられ、見上げると、大きな爆弾が吊られていたのです。まるで未来を連想させるような明るい空間の中、これは広島・長崎の展示だとようやく気づきました。

広島の小学校に通い平和教育を受け、長崎へも研修旅行に行った私は、この博物館の「敵国の粛清」とも捉えられる展示の仕方に、衝撃を受けました。歴史は人々の主観によって語られる。多様性の数だけ歴史がある。そのことを強く感じた一日となりました。」(松島)



博物館の前で

アウシュビッツ強制収容所博物館(クラクフ)

クラクフでは、旧市街などの街並みを見学する時間も多くなり、かつてのポーランド王国の面影を感じられた。一方、今回の研修旅行では、クラクフからほど近い、アウシュビッツを訪れることを重要な機会と考えた。

「私たちはポーランド研修旅行の9日目にクラクフ発のバスで約一時間半移動し、国立アウシュビッツ・ビルケナウ博物館訪問しました。見学は、アウシュビッツ強制収容所の日本人正式職員である中谷剛さんに案内をして頂きました。

アウシュビッツ強制収容所とは第二次世界大戦中に当時のドイツの政権であるナチスドイツが設置した絶滅強制収容所の事で、ヨーロッパに存在する強制収容所2万カ所の中で最も規模が大きい強制収容所の事を指します。この場所には多くの囚人を効率的に虐殺するために使用された『ガス室』があり、囚人の存在自体を消滅させてしまう事から「絶滅収容所」という別名がつけられています。

囚人に対して劣悪な生活と過酷な強制労働をしたことで世界中の約300万もの囚人が命を落とすとされており、その内の約120万人がアウシュビッツ強制収容所で亡くなったとされています。

囚人の多くはユダヤ人でしたが、その他にも政治犯、ソ連軍捕虜、障がい者、同性愛者等も収監されていました。

今回私たちは「教科書の中でしか知る・見る事の出来なかった『実際に起こった残虐的な歴史』に対して、実際に現

地に赴いて自分の五感を使うことで、その場所で何が行われたのかを実際に確かめることが出来たと感じました。「戦争という状況では、自分の事も含め大切に思っている人とそうではない人との命の重さが変わってしまう」という事、「どこの人種が優れているかで優劣をつけようとする人たちがいるこの世の中で[人種]という言葉が無意識的に使ってしまう事で小さな差別を生みかねない」という事などそれぞれが感じえたものは様々だったと思います。

このホロコーストの問題から始まる、近年起り続けている様々な人種差別問題は今後もずっと考えなければならぬテーマだと思います。今この瞬間も世界中で争いが後を絶ちません。しかし、私たちは自分事として捉えているでしょうか？又そんな私たちにできることはあるのでしょうか？「歴史を知らざる者はそれを繰り返す」これは哲学者のジョージ・サンタヤナが残した言葉です。これからの未来を担う世代である私たちにとって大切なのは、「過去に起こった目を背けたくなるような[歴史]と向き合い、同じ過ちを繰り返さないように学ぶ事、疑問を持ち続ける事」、その為にも「様々な媒体から情報を得る際は極力偏見や差別を持たずに情報収集に当たる事」や「間違ったことを正直に「間違っている」といえる人間になる事」が重要だと考えました。」(内田)



中谷さんの解説を聞く

サンスター日本語学校での交流(クラブ)

鈴木康平先生のご紹介で、サンスター日本語学校の兵頭博校長とつながり、今回学校訪問と生徒たちとの交流の機会を得ることができたのは、大変に有意義だった。

「6月13日、14日にクラブにあるサンスター日本語学校

へ行きました。この日本語学校は1998年にクラブ第五高校で部活として始まり2009年には150名を突破。今ではポーランド最大の日本語学校になり、2023年サンスター日本語学校には10歳から50歳までの260名ものポーランド人が日本語を楽しく勉強している学校です。

13日は生徒達とお互いジェスチャーを使ってレクリエーションを始めとした自己紹介を行いました。大きな声でゆくりはつきり話すことを心がけながら対話を試みました。その後簡単な日本語で行うフルーツバスケットをしました。簡単な日本語で、というのも中々難しく、何をどう言えばうまく伝えられるのか考えながら交流しました。

14日に案内されたのは習字を習っている教室でした。桜や日本、筆を持って向き合う姿勢は私たちが毎週の週末に書いた経験を思い出しました。それも束の間、自分たちも是非書いてほしいと言われ、急すぎる展開が待っていました。何を書くか、試行錯誤をしながら書き上げ、それを生徒達にプレゼントしました。

その後、別の教室の扉を開けると沢山の生徒達がお菓子やジュースが載っているテーブルを囲んでいました。その中に飛び込む私達。楽しいパーティーが始まりました。お互い緊張の中自己紹介をし、生徒達とのコミュニケーションを楽しみました。グループには様々な生徒達おり、ファーストクラスの人達から4年目の人、最大で7年の人達もありました。年齢もバラバラで社会人や大学生など様々な人と関わることが出来ました。

何故日本語を学ぼうと思ったのか、日本の何が好きか等基本的に日本語で、時に英語で語り合いました。私たちが持ってきたお土産の味噌汁、けん玉、キットカットの抹茶味等プレゼントしました。皆喜んでくれました。その後は皆んなで中央広場に行き夕食を食べました。同じアニメを推している人がいたり、ポーランドのラーメンや食文化について教えてくれたり、お菓子を囲みながら楽しいおしゃべり会をしました。ポーランド語を教えてもらったり、日本の好きな所やポーランド研修について等話題は尽きませんでした。生徒達は皆日本に來たいと言ってくれました。

生徒達と関わってみて皆が本当に日本を好きなこと、自分たちが学んだ日本語で頑張ってコミュニケーションを取ろうとしてくれていることがとても嬉しかったです。交流を通して感じたことは、自分が「ネイティブ側」になってみることで、多少たどたどしくても気持ちが伝わるということでした。また、自分も恐れずに英語を話してみようという自信が付き

ました。今振り返ると、私たちが一生懸命に英語で伝えようとしていたように、彼らもまた必死に日本語で言いたいことを伝えようと努力していたことに気づきます。生徒達が日本語を日常的に使っている、あるいは使いたいと思っている人たちの集まりだったため、異国感がなく、安心して時間を過ごすことができました。

得意な言語は異なっても「言語に共通点」があるだけで不安が和らぐということも学び、日本語を通じて伝えることの意義について理解が深まりました。とても貴重で楽しい交流の時間を過ごせたと思います。」(浅田)



習字の授業に飛び入り参加

② **研修報告会の開催**(2024.11)

帰国後の11月9日、最高学部ではポーランド研修旅行とネパールワークキャンプの合同報告会が開催された。報告会には学生、教員、保護者、高等部生が参加し、研修の成果や学びを共有した。ポーランド研修旅行の報告では、現地での交流や歴史的施設の訪問を通じて得た知見や感じたことが発表され、参加者から多くの質問や感想が寄せられた。

③ **ボメラニアン大生訪問**(2024.11)

2024年11月21日(木)～30日(土)まで、ポーランド・ボメラニアン大学の学生6名と教員2名の計8名が来日した。21日の夜から28日の昼食まで自由学園に滞在し、学生は光風寮・しのめ寮、教師は近隣のホテルに宿泊した。28日に横浜に移動、30日まで滞在し、30日には学部生が空港で見送った。

「ポーランドで出会った友人たちと、日本で再会できたことは大きな喜びだった。遠い国同士でしばらく顔を合わせていなくても、会えば笑顔で話せたことにポーランドで得た友

情の持続を感じ、嬉しく思った。彼らが日本の魅力を発見するたびに、普段日本で暮らしている私たちもまた、その魅力を再発見する機会に恵まれた。

また、今回私たちが学生を受け入れる側になり、6月にポーランドを訪れた際の学生たちがどれほど手厚く、丁寧な時間を私たちのために用意してくれたのかを改めて思われた。想定よりも早い来日だったために十分な受け入れ準備のための時間を取れず、満足な対応ができない部分も多々あったが、学部生それぞれが6月に過ごした時間を思い出しながら、精一杯の歓迎の気持ちを持って取り組みたいと思う。

ボメラニアン大学と自由学園の相互の交流がこれからも継続し、私たちが得ることのできた経験を今後の学生たちにもしてもらいたいと強く願う。」(堀越)



学部1年英語の授業と一緒に参加する



学部前で記念撮影

④ **ウクライナの子どもたち絵画展開催**(2024.12)

12月12日・14日に、ウクライナの子どもたちが描いた絵画の展覧会を自由学園みらいかんで開催した。これはクラクフで訪問したサンスター日本語学校の兵頭校長が発起人となり、2023年から日本国内で巡回展示されているも

の。鈴木康平先生が常盤台キリスト教会と繋いでくださり、開催することができた。その準備や運営にはポーランドグループの学生たちが当たった。

2024年12月12日(木)の13:00～17:00、12月14日(土)の11:00～14:00の2日間に分けて展示し、2～3人で会場内のスタッフを担当した。学部生有志が館内を巡回した際に保護者・一般のお客様とお話をしたり、中にはお客様から感想を言いに来て下さる等、鑑賞後の思いや考えをお客様と共有する事が出来た。

来場者数

12/12(木):68人(うち学部生、生徒含む子ども:44人)

12/14(土):73人(うち学生、生徒含む子ども18人)

計:141人(うち学生、生徒含む子ども62人)

募金額

12日(木) 3,595円、14日(土) 59,633円、計:63,882円
全額を自由学園クリスマス献金とした。その後、クリスマス献金全体の分配先として「ウクライナ人母子支援基金」に76,000円をお送りした。

「2022年2月24日、ロシアによるウクライナへの侵攻が始まり、早くも3年が経とうとしている。ウクライナに住む人々や、ウクライナから避難し各国に移り住んだ当事者の人々にとっても長い長い日々だっただろう。この展覧会で展示した子どもたちの絵は、ポーランドにあるサンスター日本語学校の校長である兵頭氏によって、侵攻後すぐポーランドへ逃げたウクライナの子どもから集められたものだ。9歳の子どもは12歳に、17歳の青年は成人になっているという年月がこの間に流れているのだ。もっと言えば、彼女らがどこにいてどう過ごしているのかも分からないという事実が、いま、同じ地球上で戦争が起きているということを紛れもないことだと痛感させる。

来場して下さった方々は、時間を掛けて一つひとつの絵画と子どもたちの声を真っ直ぐに受け取って下さった。「勝利は目前」という題が付けられた当時9歳の少年が描いた絵や、勝って帰るとい言葉が書かれていたが、子どもたち純心な心に「戦争」という生死を争うものに対してどのように影響しているのかも窺い知ることができた。また、一方でウクライナに言語や文化的なものが近いと言われるポーランドでの生活でさえ、子どもにとっては元々居た「世界で一番好きなところ」である自分の部屋や大好きな「ポーランドの学校や先生」から離れ、故郷へ様々な思いを抱えな

がら、見知らぬ街で暮らすことの子どもたちへの影響は計り知れないということも私自身実感した。

今回の展覧会開催は、多くの方々のお力によって支えられたものであった。兵頭氏を始め、日本で巡回展を援助する方々、そして何より私たちに絵画と声を発してくれた子どもたちに感謝する。戦争が1分1秒でも早く終わる事祈つつ、子どもたちの心の傷が癒やされ、平安が訪れる事を強く願っている。」(山下)



開催にあたって作成したポスター



見学する初等部6年生